

■ 書 評 ■

神経疾患最新の治療 2009-2011

小林祥泰, 水澤英洋 ● 編

国立精神・神経センター名誉総長 金澤一郎

神経疾患が、一般内科的あるいは他の診療科の疾患と同じようなレベルでの「治療」の対象となることが明確になってから、それほど時間が経ってはいない。私の個人的な感覚からは、ここ 30~40 年くらいではないかと思う。それまでは、感染症すらの確な治療ができていたかどうか怪しいし、重症筋無力症など免疫性疾患におけるステロイド治療もまだ確立しておらず、ましてパーキンソン病などの変性疾患については、経験的な抗コリン薬があった程度であった。だから、神経疾患に対する治療に関してだけで 1 冊の本ができるなどとは考えもつかなかったであろう。しかも、この本のいわば前身に当たる『神経疾患最新の治療 2006-2008』が出版されてから 3 年にして、既に治療の分野での進歩が著しいがゆえに全面改訂が行われたというわけだから、もう神経疾患には治療法が少ないなどとは口が裂けても言えない時代に入ったというべきだろう。

本書は前版と同様に、島根大学医学部附属病院院長の小林祥泰先生と、東京医科歯科大学神経内科教授

の水澤英洋先生のお 2 人の編集による。内容的にも「巻頭トピックス」に続いて、「緊急時の神経症候とその対処法」、「治療手技」、「疾患別各論」があり、最後に「神経疾患のリハビリテーション」が続くという構造になっている点も前版と同様である。しかし、よく見ると、それらの章の中での各項目の取り上げ方や、同じ項目であってもその著者が、前版と異なっている。同じ著者の名前があっても、担当している項目が異なっている。新しい学問的な進歩を、新しい目で捉え直そうとする、心遣いや気配りは見事という他はない。「疾患別各論」の章で新しく加わった項目には、「脳疾患」として低髄圧症候群とプリオン病・遅発性ウイルス感染症の 2 つがある。それぞれ当然入っているべき疾患であるが、プリオン病にさえ、新しい治療の試みがある時代になったことを感慨深く思うのは私だけではないだろう。さらに「内科関連の神経疾患」としてうつ状態と心身症の 2 つが追加されている。この 2 項目ともそれぞれの専門家がわかりやすく解説されているので、大いに参考になる。また、「神



経疾患のリハビリテーション」の章で「高次脳機能障害の認知リハビリテーション」が、内容に大きな違いはないが「認知療法」に言い換えられている。「認知療法」とは、精神科医療において患者が自分の病態に気付き、それを自ら修正してゆくことを助ける治療法であると思っていたので多少戸惑った。

最後に、あえて 1 つ注文をつけることにしよう。それは、脳磁気刺激療法や修正電気痙攣療法はもとより、漢方医学や鍼灸などにも言及してもらえるとありがたいということである。本書は、その題名から推察するに、3 年後にはまた改訂があると思われるが、そのときには是非、そうした項目も加えていただけるようお願いしておこう。とにかく、この書は、現役の神経内科医にとって、時代の流れに遅れを取らないための必読の書であることは間違いない。

B 5, 402 頁

定価 9,450 円 (税 5 % 込)

南江堂刊